

18
得るものなり但し第六表及第七表に於て見るか如く硬度數及緊張力が一定の制限内に於て成立するものにして硬度低き場合は其の誤差比較的大なるは免れざる所なりとす。(完)

日本刀の地鐵に關する資料(承前)

太田 熊太郎

(二)

地鐵に關する事柄は以上に止めて次ぎに刃色地色に關することを述べやうと思ふ、これも最初に一言して置いた如く地鐵といふことゝ地色、刃色などいふことゝは要するに名稱上の區分に過ぎないので實質上には殆んど同一の事を論じてゐるものと見て差支なからうと信ずる。

撰刀記に地鐵の上々のものといふのは板目、柃目など地肌に關係はない、又地鐵の色によつて作の高下を分くるといふ説があるけれどもこれは拭ひの入れかたによつて薄くも濃くもなるから此の關係をよく見た上でなくては一概に斷言し難いことである、しかし、色の濃いのは概して鐵質が堅くて良いものではないと稱して居る、然るに刀劔雜話といふ書に後世になつて拭ひといふことが行はれてから奸曲な研師は拭ひに種々の術を施して人を欺くことがある、しかし、拭ひの入れかたによつて鐵色の精色を失ふことはない、傳法を専ら正しく仕立てたならば拭ひに害はないものであるといふ、これに依つて見れば、故意に術策を施したものでなければ拭ひは本來の鐵色を覆ふものではないやうに思はれる、要するに、地刃の鐵色を以て地鐵の善惡を判斷することは古來多く行はれて居ることである。

刀劔會誌第四十號所載解紛記(三木吉右衛門傳書)に

刀の位を究る所は地色にありされば、上作ほど刃いかにも白くはぜ地うきやかに青し、但し、地色には上作にも少し白くするもあれどもぬれ色ありてすみ入むらなし、又下作ほど地色かはきて白け結句刃は青みさししるあるにより地刃の色大略似たる物也併し下作の地色にも青みたるあれども黒みさしうきやかにはずまず、如此同じ青き内にも白き内にもよしあしの位重々多し、是一大事の見處なりたとへば、名筆などを似するに上手は文字の筆法恰好は寸分たがへずうつすといへども墨色は中々にざるごとし、刀も上手の似せたるは大體の様子共にさのみちがう事はなし只似せ得ざる所鐵色なれば尤も肝要の見處なり。

刀劔會誌第百十二號所載刀劔撰學集にも地色の善惡を以て刀劔の位を定める標準としてゐる記事が見える、則ち、鉞、旬、刃の三つと併せて位之四ヶ條と稱して居る、但し本文には地肌とあるけれども左に掲ぐる内容を見れば全く地刃の色を以て終始説明してゐることが知れる。

地肌のこと始縁集には性とて位のとうとりに定め置かる、去れば師にむかつて曰く、上作の地色のぬれくくとぬれ色ありてせいくと青く美しき事はいかん、答曰黒金を打延べては返し打のべてはかへし度を重ね悉く土の氣を去りせんじて地金に用ゐる故に地金の少しも土の氣残らずすみやかにしてすきとをる如く青かれ白かれぬれくと地光り有てつやあり是を青金の地色と名付て位のとうとりとす。

又問ふて曰く、下作の地色の乾色にして物淺く見ゆることはいかん、答曰下作は大形に鍛ひて地金に用ゐる故土の氣残つて地金にございかにほど細かにても乾き色なり是を濁乾の地色として下の位の見所なり、又下作もよく鍛はんとして度を重ねて鍛へば土の氣つれて黒金の性ぬけて金よくなる故にたとへ能つまりてもうかくとして光るぬれく色はなし、肌を得ざる所は地色なるべし、たとへば、名筆などを似するに墨色のならざるほどの事なり。

右の文の續きに地ふ地かけに就いて得失を論じて居るがこれは後段に述ぶることとし、茲に省略する雪解集にも解紛記と略ぼ同一の記事が見える。

刀の地艶といふは地、焼刃の鐵色なり同つやといふも地にぬれ色ありと云ふ是にて位を極むべし（以下解紛記の記事と殆んど相違の點ないものであるから省略する）

刀劔固癖錄にも古書に色を以て鐵の善惡を知ること至極とす云々といふことを舉げて居る猶同書に次の文字がある。

古書に上作の地肌は青く寒へたる底に州さきに波の洗ひ残したる眞砂を見るが如しと云ひ或は又刃縁笹の葉の上に薄雪の降りかゝりたる風情などいへるも此皆歎美の辭少しも濁りなきをいふなり總べて寒へたるものには一點聊かなるものも鮮やかに見ゆるなり遙かに空虛を望んで星辰の群集して顯はれたるが如し絶えて無効なるあるべからず肌なき鐵は勢氣なし云々。

猶秘傳書下卷に見ゆる上作下作論は則ち地刃の色によつたものである。

一上作は刃白く地色青し中作は刃青く地色黒し下作は刃黒く地色白し。如此上作ども何れも刃いかにの白く鍛ひのふさくる事一切あるべからず、但地肌には上作の内にも作によつて少し白けたるものあるべし、され共地色にしるありて乾きたる事あるべからず是第一の心持也。

さて色に依る刀劔の良否判定の標準として最も一般に行はれて居るものは次ぎに掲ぐる所のものである。

一上作は刃白く地色青し

一中作は刃青く地色黒し

一下作は刃黒く地色白し

右はいづれの刀劔書にも記されざるはない位に遍ねく行はれてゐる所の掟であるがこれは極めて概略的に規定したものであつて此の三種の色のの中にも亦夫々變化特色があり随つて其間に種々優劣も認められてゐるのである、凡そ刀劔書に見える上下作論を検すると孰れか地刃の色換言すれば

地鐵の良否を基礎として居らぬものはないと稱して差支なからうと思はれるのである。扱て茲に考ふべきことは是等の青とか白とか黒とかいふ色の意味である。是等は勿論普通に想像せらるゝ色の觀念とは多少趣の異つたもので特殊な感じを言ひ現はしたもののやうに思はれる、それ故相當に斯道に實地經驗を積んだ人でなくては其の微妙な色の感じは體得することは困難なことであらうさうとしてこれが決して十人十種的な獨自的な性質を帶びたものではなく其間の消息に通じて居る何人にも共通である所の確乎たる事實の上に組成された觀念である事は競ふべからざることのうやに信ぜらるゝ、以下更に鐵色に關する説を掲ぐることにする。

如手引抄に五種の色といふことがある、これも無論地鐵の色を稱するものであらうと思ふ。

一 そらの色 晴れたる時雲間の色を譬ふ世にすん(同)色に及ばじ[上]

一 はれ色 光をうつすなるべし[上々]

一 くろむ色 替るをしえなし色のにごり黒む心をいふなり[下々]

一 あざぎ色 細 そらの色に一しほこきを云ふ[中]

一 しらき色 白 光をうくるなるべし色の白むを云なり[上中]

次ぎに刀劔固癖錄の色に依る地鐵の優劣判別法を掲げやう、則ち同書に、色といふのは青、黃、赤、白、黒の五色である、刀劔の地鐵は元黒鐵であるが鍛鍊其他の作業によつて種々色も變化してくるのであるといふ。

一 青色 精煉能く濁を去り寒へ深地鐵光有つて紺青に等しきもの最上とす、古書にトカゲ色と云

ふ是なり但蝦蟇と云ふ蟲の尾に似たり、青色深淺に依つて次第を分つ。

一 黃色 金氣なり地色光なく輝なく勢氣含む處自然に顯はる氣なり、古書にキラといふこと有り

又電などいふ皆此類なり是亦最上に非れば發することなし。

一青亦 世上に紺紫と云つて歎美する處至極鍊れ深く和かなる鐵色なり最上作なり、但青色深淺に依つて次第を分つ。

一青白 中作なり地色青く肌口白みたるを云ふ但青色深淺に依つて次第を分つ。

一青黒 中作以下なり但青色深淺に依つて次第を分つ。

一黒 下作なり。

一黒赤 下作なり地鐵コワキ色なり。

一黒白 是亦其次なり總べて少しにても青色を加へざるものは一向用ふべからず近く譬へば絹布染色大槩同意なり強弱者へ合すべし。

一割色 此亦陽氣の顯はるゝ所なり、精白冷え深きもの最上なり、地鐵は最上なるもの刃亦最上なり。

其次は青白、其次は青黒、其次は黒色なり。

割色最も白きを上とす古書に雪の如しと云總べて精て冷えたるもの必青色さり依つて青色を加へざる決して取るべからず青は鐵の力なり。

刀劔撰學集には地鐵の色の黒白青三つの清濁の量如何よつて上中下を判別することを記してある。

一青色のかちたるは上内 青金、青黒、青濁として三色あり。

一白色のかちたるは中内 白金、白黒、白乾として三色あり。

一黒色のかちたるは下内 黒金、黒濁、黒乾として三色あり。

而して撰學集の著者の鐵色に關する説を紹介すると元來黒金の根本の性は空體白色といつて白の
一色に定まつたものである、則ち鍛を充分にして土の氣を除去すれば必ず練り拔きの絹のやうに白くなるのである、然るに青色を以て上とする所以は白色は必ず或る場合に於いて青みを生ずるもの

である、水も元來白いものであるが水底深ければ青々と見える空氣も元來青色ではないが白色が重つて美しい青色になるのである、これと同様に黒金もよく鍛へて悉皆土の氣を去つてすみやかに白くして地金に用ふるによつて必ず青みが出るのである、又作によつて底に薄紫色の光の見えるのはたとへば深淵の水面が紫色を呈するやうに青色が重なれば紫の光が出るものである。斯くの如く上作の鍛へは土の氣を去り白く鍛ひ詰めて刀に作るから底に青味が出るのである、又青みが重つて薄紫の光となるのである、かくの如く變化して青色に至るものを是を青金の地色と名づけて上の内の上とするのである。

白色を以て中の位にするわけは黒金の性によつて、いかほどよく鍛へても青みが少ない鐵がある、此種の鐵は白けた様になつて地よわみ見ゆるものであるから白を中に定めるのである、又黒色の勝つたものを下にする事は鐵に土の氣残つて白い金性をよごしその濁りが重つて必ず黒みが出るのである、黒色はいかほど重ねても光澤ある色は出ないものであるから所謂乾色である、是れを黒乾きの地色と名づけて下の下とする所以であるといふ。

鐵色の變化を空氣や水の色の變化と比較して説くことの當たものであるか否やは姑く措き兎も角地鐵が白色の中に青みを含んだものを以て最上とし更に青色の中に紫色を帶びてゐるものを以て稀有の最上作と認めることは右に述べた刀劔固癖錄の説ともよく一致する所であり且つ個人の作風などを記して鑒定書の中にも折々見えることである、今一例を示せば、古今銘畫秘談抄、刀鍛冶など孰れも慶長頃の奥書ある鑒定書の栗田口吉光、栗田口久國、鎌倉正宗など所謂上々作と稱せらるゝものゝ作風を記したもののゝ中に「地色は青く見えて底に紫色あり」云々といふ文句がある而して是れは上々作と稱せらるゝものに限るやうである。

是等の例に徴して少くも鐵色に關する説は古來から行はれてゐる説であつて相當に根據あるもの

であることを首肯し得ることであらうと信ずる。

(三)

三地色についての記載は大體以上に止めて次ぎに主として地肌と稱せらるゝものに就いて述べやうと思ふ、再三辯明する通り地鐵とか地色とか地肌とかいふ言葉は共通に用ゐらるゝ場合が尠くないのである、たとへば、撰刀記、刀劔固癖錄などに地肌と稱し乍ら其の内容を見ると殆んど地色を以て説明してゐるものであることは前述の通りである、但し普通地肌といへば板目、柾目、綾杉、梨子肌、砂流地、ケイ、金筋、移り、沸、匂などを稱していふやうである、就中、板目、柾目、杢目、梨子肌、綾杉などの肌に最も多く適用せられて居る、最初地肌の利害得失を論じた二三の説を掲げることとする。

新刀辨疑卷之一に地肌は總べて世人の賞美する所である、然るに今好むべからずといふのは如何なるわけであるかといふ問を出し其答に、

一根元の鐵には肌なし鍛冶の家流によりて板目、柾目と品異るといへども鐵を數遍鍛ふるは本地鐵を細美にし飽くまで堅く造らんが爲めなり數百歳の後自然に鍛目顯はるゝは殊勝なれども是さへ同じくば地鐵の透間なく譬へば羽二重の如くにあらまほしけれ、始めより肌物に造り立つるは鍛冶の心も好む人の心も至らずといふべきなり肌は鐵の練り合はざる所より顯ると心得て近かるべきか、又刃迄肌立つものは猶更よからぬ事なり。

新刀問答著者は右の説を評して一偏の論であると稱して猶次のやうなことを述べてゐる。

一地鐵細美に羽二重の如く麗敷見事なるは助廣、中河内などなり、されども刀劔は見事ばかりに限らず物能く切るゝを賞美すべし、古書にも名劔は鍛松皮の如くなりとあり、羽二重の如くなしといへども地鐵強く鍛詰り第一水氣充分にして光りある鍛へをよしとすべし大業物なり云々、水心子も右の新刀辨疑の説に對して批評を試みてゐる。

一根元の鐵に肌なしとは取るに足らざる説なり、鐵に限らず、砂石に至るまで自然にて肌あるものにて萬物肌なきはなしと知るべし、然れども其中に明に肌の顯はるゝものと現はれ難きものとありて鐵は肌の明に顯はれざる物故、根元の鐵に肌なしと云ひたるならん、又板目、柃目の肌と鐵の練り合はざる處とは大いに異なるなり、但し刃に肌あるものは刃味の爲めによからず……尤下手の鍛たるのは肌に透間ありて練り合はざる如く見ゆるもの多し、故にさは云ひたるか、又數百歳の後自然に肌の顯はるゝと云ひしも尤に似て誤なり、根元なきものゝ顯はるゝ事なし、粟田口物などには今數百歳の後なれども一向に鍛目の顯はれざるものあり云々。

新刀問答の著者も水心子も共に新刀辨疑の説を抗撃せんとして居るのであるが、其批難は背筋に當つて居らぬやうである、殊に辨疑にいふ肌と水心子の肌と稱するものとの間には大いに性質を異にするものがあるやうに見える、辨疑にいふ肌は徹頭徹尾刀身の板目とか柃目とかいふ折り返へし鍛へた結果生じた所の肌若しくは折り返へさぬまでも打上後の刀身地鐵の肌を意味するのであつて、水心子のは或る場合には鍛へ肌や打上後の地鐵の肌を指して論じてゐる場合もあるが、時には萬物肌なきはなしなど稱して辨疑のいふ肌を穿き違へて論じてゐると思はるゝ點があるやうに見受られる。

元來刀身上の肌模様が一見して之れを明にし得る程に顯然たるものは優良のものとは認められないのであつて、多年斯道に經驗を積んだ人が熟視して辛うじて認め得るほどに鍛のつんだ細美のものを良しとすることは一般の定評とするものゝやうである、要するに新刀辨疑の説は鍛のつんで細美至極のものを良しとするので、其の肌と稱するのは鍛へ肌をいふのである、水心子と雖も鍛細かに地鐵の肌細美なるを良刀としてゐることは、刀劔實用論後篇の一節を見れば了解し得ることである。

一刃味の根元は鍛細かに糠目なく玉の如きを以て善しと致し候鍛細かに候へば刃至つて委しく付刃先たとへば毛の先きを見る如く共申すべき様に一向見えざる物に御座候云々。

刀身上の肌の有無が刀劔の實質上の價值に關係を有するものであるか否かに就いて古來殆んど論議せられたものゝあることを聞かぬ、若し有之とすればそは大部分は肌の有無と刀劔の實質上の善惡とは全く別個の問題であるとする説であらう、しかし、實際に刀劔の愛好せらるゝ所以のものは多く地肌の美にあることは否定し難いものゝやうに思はれる、而して此二者が何等の關係なく別個のものであるとする説には充分研究の餘地があるやうに思はれる、古來の鑒定書などに就いて考へて見ても地肌の良否と刀劔の良否とが無關係のものであるといふことは到底首肯し難いやうに思はれる、俵先生は沸、匂、移りなど刀劔の肌模様と刀の切味との間に多少の關係あることを認められて居る。(報告第三、第二十參照)こは然かあるべきことで古人はこれを経験的に自然的に兩者の大體一致すべきものであることを會得したものであらうと思ふ、猶地肌の有無と其得失に就いて二三の説を以下に列舉して見やう。

刀劔或問の著者は刀劔に肌有るも無きも金氣の精神全うして位卑しきことなればあへて優劣の差はない、栗田口吉光、國吉に肌はないが名工であり、相州正宗、郷義弘は肌有つて名工である、是に依つて考ふれば肌の有無は刀劔の良否に關係ないと稱してゐる、栗田口吉光、國吉に肌なしとは如何なる意味であるか了解し難いけれども從來の鑒定書などを見ても是等の刀劔に肌なしとは思はれぬやうである試みに古今銘盡の吉光の刀の説明の一節を抄録して見やう。

一此作は柾目の鍛なりと雖も刃の上より地かね半分までは板目半分より棟の方は柾目なり上々の出來物は板目の杳肌なし板目の鍛の内にともえの如くなる杳あり、又梨子肌なる鍛もあり地色は青く見えて底に紫色あり……………太刀には地符ありて沸荒く多し。

更らに解紛記の説を抄出すれば、

一此作は板目、柃目のわからぬ多分は板目のやうに見ゆれども又出来物ほど吁にして少し梨子肌なる多し他流には板目と柃目のかどを平に造りはかたを板目に鍛ふと雖も確には見えわかずいづれも細かにして地色取分美し(中略)銚こまやかにあつく銚をしき殊更ぼうしの匂勝てもえたつ様に見ゆるものなり云々。

次ぎに刀劔撰學集の板目、柃目の論を紹介する、

一(上略)上作に板目もあり下作に板目も有れば是亦位のきりかけにはあらず、其上二つの鍛は慥に法度定まらざるものなれば地はだによく心をつけてけつくあだになるべきもの故板目の作もよく出来すれば正目の如く細かに見ゆるものなれば残る切かけを本として地はだをば大形心得べきものなり。

右は板目と柃目との得失に就いて両者が別に差違なきものであることを述べてゐるのであつて進んで等は等の肌鍛が實質上に如何なる關係あるかについては論及して居らぬのである、肌鍛の利害得失については水心子が議論を試みて居る刀劔辨疑中之卷に、

一肌鍛とて敢へて好むべきに非ず又捨つべきにもあらず仕方によりては益もありて且つ見事なり、子細は無垢鍛にして大出来なる時は折れ易けれども肌鍛なれば大出来に焼きても折難し正宗、義弘、則重等則ち是なり、右何づれも肌鍛にして銚深なる出来だけれども業に障りありたる事も云傳へず尤句出来にして地刃の境くつきりとしたるは古太刀、新刀共に刃強なるもの多し、又肌鍛に荒銚などを焼きたるものは火に剋されて刃色あつとりとして刃味も悪しきもの多し云々。

27 更に刀劔實用論後篇には次のやうな説を掲げて居る、

一鍛冶は刃先迄肌のこれ有り候者は刃柔にして宜しからざる事を存じ候故肌鍛などは三枚造とて兩平二枚は肌鍛の鐵を用ゐ中の一枚刃になす所は常の如く鍛いを用ゐ三枚取合せて造候事多く御座候能く肌の顯はれ候時は郷則重などの如く見事にて目利者も譽候者には候へ共見場のよき迄にて實用の法には御座なく候

解紛記(刀劍目利書亦同斷)にも地肌の有無の得失を論じてゐる、

一板目、柃目の二つの鍛は何れにても上作、下作あれば位こわりはかつて知れず只此後は大筋目を分つべし……白地ふかけ、梨肌かやうのはだへも上作、下作によらず面々の手ぶりなればこれも位は知れず去乍らこわりの時は他力を以ててつだいに成るべし、但し右の肌何づれも勝れては疵になるなり、又種々の切懸をはづしても無地なるを好むことなれば同作の内の出来不出来の位をばはだへを專にして甲乙を究むべしたとひ刃しほあひなどは不出来なりとも地肌さへよくば左のみ代のひくる義はあるべからず、又刃に匂ひいかほど當るとも地肌烈しくば過分に代のひけに成るべきもの也。

猶撰刀記に「すべて餘り多く肌のあるものは殊更に作つた肌でなくてもよくない、殊に刃の内に肌のあるものは物に觸れると其肌から缺け易い」といふ、刀劍實用論附言にもこれと同様のことを述べてある、古刀でも新刀でも刃先迄銀筋などあるものは上作といつて下手な者の及ばざる所で甚だ見事なものであるけれども刃味の柔か過ぐるものが多くて骨に當ればまくれ易く或は刃の方へこむ事があるすべて彰うつり、銀筋など其外の景様は名人のする仕業で武用の爲にはあらぬといふ、右に述ぶるが如く水心子は此の肌鍛を實用上大した有益のものと認めてゐないたゞ肌鍛であると無垢鍛て大出来物の折れ易いのを防ぐ効力があると稱して居る、然るに前掲の解紛記(刀劍目利書亦同斷)だけは地肌と刀劍の實質上の良否と離るべからざる關係あることを認めて居るものゝやうである。

(四)

以上は地肌に関する所論を掲げたのであるが次ぎには板目、柾目、綾杉、梨子肌など明かに地肌と稱せらるゝものは勿論、其外砂流、銀筋、チケイなど稱する是亦地肌に屬すべきものと認むべきものを列舉し其の説明的記事をも附加することとする。

イ、板目、柾目(杢肌)

一 地の底に鐵の鍛のモクあつてたとへば木を割つて其肌を見る如くなるに依つて是をモク膚と云ふなり。(竹翁古刀奇鑒天卷)

一 木の杢を見る如く鐵の肌見ゆるを云ふ(或一本底にあるとは誤りなり肌ならば上にあるべし。

(如手引抄)

一 板目、柾目とて是も二つあり深き習はなし鍛の重りたる板目と小板目との事なり、但し板目の内大板目、小板目、うづまき肌、すながし柾、又柾目の内大柾目、小柾目のきはだ、ともいふ、柘はだ、ねりねき、ともいふ、梨はだ、けさん、ともいふは如是二つの内に入つあり。(刀劔撰學集)

一 板目といふは鐵の合目を宗刃にして平を平に造るに依つて杢の如くなる肌なり。

柾目といふは鐵の合目を平に作るに依つてのきめのやうなる肌立にあるべし、柾目に板目の如くなる多し、然と雖も肌の筋とかくたつ(縦)にゆきとまるべきものなり、板目にたつにとまりたる肌はあるべからず、此二つの地肌の分ちを以て大方すぢくを知ることもなれば是第一に見分事肝要也。(秘傳書下卷、古刀鑒定口訣、銘盡秘傳抄)

一 地肌に板目、柾目あり是は木の板目、柾目といふ杢にたとへたる事鍛立に直なるを柾目といふ又鍛の狂ふをば板目といふなり、併し山に成物は鍛あらはれざるによつて分ち知れず、惣別柾目と慥に見ゆるは和州限りなり。(刀劔目利書)

一板目、柾目と云ふは木の板目、柾目の如くたとへて鍛目の堅に直なるを柾目といふ、又鍛の狂ふをば板目といふなり、併し出來物は鍛あらはれずしてムヂなるによつて分ち知れず此二の鑑に甲乙はなし。(雪解集)

ロ、梨子肌及びキン

一ありの實の切口をたとへて梨肌といふ。(如手引抄、宮崎博士所藏刀劔書)

一梨肌といふことは是は地の内の鍛さうりと云て梨子を割りたる肌の如くに光る心ありて青江に幾多ある肌なり外の作には稀なり口傳有り。(書名ヲ失ス)

一梨肌とは地心もちそうやうさらりとして梨子を割りたる小口の如くなるを則ち梨子肌といふなり。(竹翁古刀奇鑑)

一梨肌といふは無地にして梨の小口のやうに粒立氣味有るを云ふ。(刀劔目利書)

一梨肌といふは地肌つまりたる内に梨の切目のやうに粒立きみ有るをいふ位無地なるには劣るべきか。(雪解集)

一キンといふ事は梨子肌とは少しく異なる、たとへばケンサンの天目の肌の如き心を譬へたる如し、一段と光る心あり、又云篠の葉の上に薄雪の降りゐて消残りたる風情の如し梨肌よりも珍重なり、口傳に云備前物にては梨肌といふ栗田口鎌倉にてはキンといふ説も有之。(書名ヲ失ス)

一さんのち？刃の内に銀の絲を引きたる如くに細き物あるをいふ。(宮崎博士所藏刀劔書)

ハ、松皮肌

一地鍛惡しき故肌荒し松の皮目をたとへて松皮肌といふなりすがし心此肌に近し。(如手引抄)

一地肌につまりて荒き故いかにも大空にのたれて松の皮を見る如くなる有り、則ち是れを松皮

肌といふなり。(竹翁古刀奇鑑)

二、のき肌

一是は釘の先きにてつきはしらかしたるやうなるを云ふのき先きの如くなる白き肌の色の底に見ゆるを云ふ。(如手引抄)

一地の底にいかにも細くノキ筋の如くにして鑑の見ゆることありこれをノキに譬へたり。(竹翁古刀奇鑑)

ホ、雲肌

一晴れたる時白雲のたなびきたるをたどつて雲肌といふ。(如手引抄)

一地の上に白くひきたなびきてくもりたるを肌くもりの地といふなり。(竹翁古刀奇鑑)
へ、水流の鍛

一地の内腦れて細く絲の如くなる鍛あり色定まらず、是則スナガシの鍛といふなり右の心に口傳多し。(竹翁古刀奇鑑)

一水流といふは鍛目波のウネのやうに揃ひたるをいふ。(刀劔目利書)

一水流といふは鍛目浪のうねりのやうに揃ひたるをいふ、位下の下也。(雪解集)

一すながし湯走りなどいふもの刃文にあるものあり、此のものも全く刃紋一方のものにて有なしにかゝつるふものにあらざればなり云々。(撰刃記)

ト、すみ肌

一すみ肌と云ふことは何になりとも地の内に青く一段と替りたる所あり、左のみ長くはなきものあり口傳多し、但し青江には別而有る肌なり外の作には稀なり。(書名ヲ失ス)

一墨肌は地肌をすかし見れば所々にかくの如くくろく見ゆる、但し黒色はいかにも速かにつやくろみなり、たとへば水晶の黒きを見る如くに黒く見事にすみ肌短く右の如くちよろちよると肌ある掟なり中の上なり上くらいにある定也。(刀劔會誌第三百三十一號「人間五體之傳」)

一澄肌は地の色よりも黒くしみて村有るを云ふ際立たるを鯨といふ多分備中青江是也、仍て青江肌といふ。(刀劔目利書)

一澄肌といふは地の色より黒くすみて村有るを云ふ是は多分備前物に定まつて有るにより備前肌ともいふなり際立ちたるをなます肌と云ふ但し是も備中物に大略限るによつて青江肌とも云ふ也何も下也。(雪解集)

一地肌所々に黒みあるをいふ。(宮崎博士所藏刀劔書)

チ、チケイ

一チケイといふ事は太刀刀の刃惣よう細てやき何れにありとも惣の刃よりふとくやき或はなれて少しみだれたる所あるを云事なり口傳多し。(竹翁古刀奇鑑)

一刃の上焼ざかひにすながしにてよく地符にてよく見事ある空肌の如き鍛を見ふるもの至つて上作にあり。(古刀銘盡大全)

リ、地符

一地符といふ事は地の内に何れになりとも刃のかけの如く所々にあり、但し作々に依り地符のありやう異なる也口傳多し。(竹翁古刀奇鑑)

一地符とはすみ肌の如くに白く見ゆるを云ふ但しくろきも有れども墨肌の如く黒色見事にすみやかになくたとへば木などに薄墨を付たるを見るごとく黒色白けて見ゆるを地符と云ふ地符は中位より小反迄地符あり小反より末には同地符にても近きほど白く見ゆるを覺よ。

〔刀劔會誌第百三十一號刀劔人間五體の書〕

一地かねの鍛にあり地肌といふも凡同意なり。(古刀銘盡大全)

一地符は地の色よりも白く村立ち薄雲の如く成るをいふ。(刀劔目利書)

一地符といふは地の色よりも白く村立ち薄雲の如くなるをいふ位中ノ下也。(雪解集)

一地に白くへた／＼と肌見ゆるを云ふ。(宮崎博士所藏刀劔書)

一地ふ地かけ此地ふは鍛とも湯走りとともなく村々の白み地かけは地色なり黒く村あり地ふは刃を渡すとき地金が直ちに湯にあたらずして土の下にてわきて鈍るに依つて湯走りとともなく村々と白し又かけは鍛を重ねるに金に村ありて上の金一重も二重も切つて下の金みゆる所が黒し此地ふ地かけは有てよきにあらざたとへ有作にも出来物にはなきものなり但し此肌は備前物に限りて多く有に依つて是を備前肌ともいへり備前物にはかんにんなり備前より外の作にはさらうことなり。(刀劔撰學集)

〔右刀劔撰學集の地ふ地かけの説明は夫々切離して登載すべきなれどその結果は或は原著者の真意に悖ることの保し難からんことを恐れて此條にかく原文のまゝ載録することゝした次第である。〕

又、稻妻

一地符の如き中に一段見事に光をなし焼さかひに多く至つて上作にあり。(古刀銘盡大全)

一いなづま又地けいはあるものも亦もとと同じく有なしにかゝはることなしされども中以下の作になきものなりたとへ三作なりともこのものあるは稀なり。(撰刀記)

是亦地けいいなづまは夫々の部に一々記載すべきであるが便宜上こゝに掲げたものである。猶いなづまに關する記事は他にも多かるべき筈なれども今は僅かに右の二つを抄録し得たるに過ぎず他日發見次第追録することゝすべし。

ル、移り

一 移りといふことは地と刃の間に刃の缺けのやうなるもの底に見ゆるをいふなり、自然作に依つて好まざるもありすべて刃の足のなき所は刃の惡しきと心得べし。(竹翁古刀奇鑑)

一直刃のとき刃にそひて細く此ことく有此ことく(原文に此ことく云々とあり別に圖解なども見えず、蓋し最初の原本には圖解などありしもそれらのもの省略せられ是等の文字だけ殘存したるものであらう)刃にくろくそひ見ゆるをうつりといふ白く見ゆるを目かげと云ふ惣にそひてあるもあり三分一有此うつり日かげは小反物と定よ直刃の大事なり。(刀劔會誌第三百もあり半分そひて有もあり)

十一 第刀劔人間五體之傳

一 移りとは平に刃のかげの様なるものあり備前物に多くあり元より先迄つゞきて有もあり兼光などには極めてあり。(古刀銘盡大全)

ヲ、良

一 良と云ふは地の上に浮きて曇りたる良砂子を卷たる様なるを云ふ。(刀劔目利書)

一 良といふは地の上にうきてくもりたる銀砂子をまきたる様なるを云ふ位下也。(雪解集)

ヲ、蟬の肌

一 肌へに蟬の羽の如くの奎有るを云ふ。(宮崎博士所藏刀劔書)

カ、湯相

一 湯相といふ事は地と刃の間に底に沈みて刃ふちの如く糸筋の如くに見ゆるものなり能心を付けて見るべし口傳あり。(竹翁古刀奇鑒天之卷)

ヨ、スエル

一 スエルといふ事は刀の先六七寸計上に地色表ほど〇〇(二字不明)に替て薄烟りの懸りたる

やうに白けることあり、それは鍛冶初而打ときに槌をきつく打廻て薄く成りたる所在之とき
火入又打くべやうによりて如此色出る深き口傳あり。(竹翁古刀奇鑑)

タスカル

一スカルと云ふ事は太略鎌倉物にある習何れも刃くるひ大みだるゝものにあり、刃狂ひたる
故に刃の内に地の出見ゆるを云ふ事なり口傳あり。(竹翁古刀奇鑑)

レシミ

一シミと云ふ事は刃の上に地の出る事を云ふ也、古作物に大略有によつて鍛弱くなり惡しき
故に地出るなり、亦云ふ古き品を下手研して押し過して地の出ることあり、一タンと惡しき事
なり口傳等多し。(竹翁古刀奇鑑)

ソ、地足

一地足と云ふは刃の内に地亂れ入る先きを云ふ。(刀劔目利書)

右に擧げたものゝ中には地肌として掲げることの不適當のものもあるかも計り難いがこれは識者
の叱正を俟つて改むべきものは改むることゝし今は姑く一個の考へに随つて茲に網羅することゝ
せり。

(五)

最後に窪田清音の撰刀記の中に見ゆる刃音といふことに就いて述べやうと思ふ、刃音といふことは
刀の長短、肉置、其他種々の形狀によつて夫々變化することであつて純粹の地鐵の判別法としては不
適當のやうに思はるゝが清音の説によれば必ずしも然らず、地鐵の如何が大いに刃音に影響を及ぼ
すものゝやうに説いて居るのでよつて次ぎにこれを掲ぐることにする、但しこれは据物切りの場合
の實驗に基いたものであるといふ。

36

「地は元より刃心の勝れたものは刃音輕くて殆んど音が無いといつてよい位である、又刃肉にもよることがあつて肉の厚いものは刃音高く肉の薄いものは低いしかし其厚薄の中にも種々の區別があるので随つて刃音も亦種々である、然るに刃肉がなくても刃業の劣れるものは肉置の多い業物よりも刃音が高い、上々の勝れた作物は刃肉が厚くても刃音むく／＼として輕いものである、其以下のものは刃音が高くても重いものである、近世据物を業とする者の説に古身は刃音低く新身は音が高いと稱するけれどもこれは委曲を盡した説とはいはれない、古作は自然砥數を多く經て肉置が薄いから音が低い新刀はこれに反し勢ひ肉置が厚いのが多いから刃音が高いけれども刃音の薄い中にも肉置の區別があり又厚い中にも又變化があるといつて左の如くに區別を掲げて居る。

一音なき刀

上が上なり音なしとてさらに音○○○にはあらざれどもひざきありとも無しとも聞なざるゝをいふなり。

一すらりと音する刃

此中にも輕きと重きとのわかしあり上なる音はすと計りきゝなされし音なきに等し。

一ざらりと音する刃

これ亦重きと輕きあり上なるはさとのみ聞きなすなり。

一つんとひゞく刃音

是も高きと低きとのたがひありこれも上なる刃音なりづと音するは次なり。

一ばざりと聞ゆる音

是は刃惡しきなり此内にも高下あり

一どん又どざりとする音

是は刃味惡しきなり刃あしき刀を切りなれたる者の手練の手業にて切るときはかくの如き音するなり

猶以下のやうな場合にも刃音に相違を生ずるものであるといふ、則ち深い棒樋のあるものは其樋へ風を含んでヒウ／＼といふ音と共にさなりとかすらりとかいふ音がするから自然刃音高く聞ゆるものである、たとへ風を含む音を除外しても深い樋あるものは刃音は刃位より高いものである、又鑢が刃の方に片寄つてゐるものは刃音が高い鑢の高いものも音が高い、又長短によつても相違がある、長い刀は刃音高く短いものは刃音が低くしまつてゐる、其中平打は殊に音が輕いしかし平打でも研が惡く刃先に惡い肉付があつて丸刃のものは音が高い、長いものが高く短いものゝ低いのは太刀を打つ人の刀の通ひによつて相違が生ずるのであるといふ、刀の通ひ云々といふ言葉は意味が解らぬが其まゝ書きあらはして置く、又だびらの廣いものは音が荒い要するに上々の刃は刃音が低くて輕いものであるといふ。

右に述べた刃音のことはこれをあらはす適當な言葉がないので感じたまゝの音を記したのであるが人に依つて音の聞取り様が違ふこともあるから此點は宜しく推察して判斷してもらひたいといふて居る。

以上撰刀記の刃音のことを讀むと一見刃味に關することのやうに思はれるが、しかし仔細に其性質を考へて見れば是等が地鐵の如何によつて生ずる現象であらうといふことは容易に推察しうるやうに思はれる、文中に數多使用せられてゐる刃とか刃味とか刃音とかいふ文字は所謂刃の意味ではなくて刀といふ總稱的の意味を含んでゐる場合が多いやうに思はれるのでかくは地鐵の條下に掲げた次第である。(完)